

タイトル	アルベール・カミュの青春の思想：自己石化志向と「世界」
著者	佐藤，卓司
引用	北海学園大学学園論集，122：23-39
発行日	2004-12-25

アルベール・カミュの青春の思想

—— 自己石化志向と「世界」——

佐 藤 卓 司

1. 光の自然に対する生の情熱から「世界」へ

アルベール・カミュが幼少年時代から青春の初期の17年間を過ごしたアルジェ市内のベルクール地区は下町の貧民街で、そこに在る母方の祖母の家に彼は母や兄と共に住んでいた。二階建ての家には二間しかなく窓も小さいのが一つだけ、又家具・調度品も少なく殺風景で薄汚なかった。彼の父はブドウ酒貯蔵庫の番人で下層階級に属していたのだが、父の戦死で彼の母は弾薬製造所で働きながら一家を支えていかなければならなかった。

元々この母は文盲で聾啞者の上、病身であったので、貧困の中で生きているうち心労も重なり、「沈黙」だけでなく「無関心」にも支配されるようになり、いつしか母親は息子カミュに「良き栄養を拒んだと同じく良き言葉を拒んだ。」《De même que jadis la mère refusait à son fils la nourriture bonne, de même elle lui refuse aujourd'hui la parole bonne.》⁽¹⁾ という風な接し方をしていたようだ。

貧困は物質的欠乏を意味するが、カミュにとって何物も持たない裸の状態となるというこの現実の比喩的意味のほうが、自然と最も身近に接して生きることの純真さを取り込みながらはるかに重要な文学的価値をになっていた。すなわち彼は持ち前の鋭敏で豊かな感受性と精神の孤高性でもって、文明社会で有償化された価値、財産とか金銭、地位等に支えられなくとも誇りにたる人生はある、何故なら彼は貧困とかその境遇の中にあるからこそ孤高に生きるべく頑なまでの意志と燃えるような情熱を優先して、その為には貧困にとっては享受しにくい文化的有償の価値を最初から自分には無縁のもののように切り捨てて、この代償に光り輝く浜辺、銀色の波、夕日に映える岡とか糸杉等をふくむ空、海、大地にこそ何物にも代えがたい無償の価値があるんだという信念があったからである。こういう彼の信念を支えてくれたものは、古代ギリシャ以来の悠久で荘重な自然への崇拝・賛嘆の念であったようだ。事実彼は「原初的な神秘の感覚、事物はまさに事物以上のものであって、生きている存在は事物を通して明らかにされる。」⁽²⁾ と指摘されているように、「トレメンドウル（恐ろしきもの）」とか「タンポム（驚愕）」への古代ギリシャ人的偉大さへの感覚とか感嘆の念を抱いていたようで、古代と変わらない永遠のみずみずしさを保つ太陽の光や大気、海、大地の悠久な自然のいとなみの中に公正厳密な宇宙の神秘と威厳を強く認識

していた。カミュ自身神とまで崇めた「世界」は換言すればこの宇宙の神秘と威厳の備わった非人間的世界のことである。そして彼にとって何物にも換えがたい貴重な財産とも言うべき「世界の豪華や富」、とりわけ光の世界へ「尊大でナイーブな渴望でもって接近した」。《Camus aborde le monde sensible avec une gourmandise insolente et naïve.》⁽³⁾ カミュはまず感覚的に充足することからそこへ入っていった。それも通常の意味の受身の充足を超越して、光の世界と自分の肉体との積極的な結びつきの中でこの世界への愛を率直に告白している。

「空から落ちてくる素晴らしい光。下の方にさざ波ひとつ立たない海原が青い歯を見せて微笑みかける。顔の片側だけ照りつける陽光を浴び、風の中に立ちつくしていた僕は、一言も発することができずこのかけがえのない時間の流れを凝視していた。」

《Admirable lumière qui descend du ciel. En bas, la mer sans ride et le sourire de ses dents bleues. Sous le soleil qui me chauffe un seul côté du visage, debout dans le vent, je regarde couler une heure unique sans savoir prononcer un mot.》⁽⁴⁾

「世界は光に浴していれば、太陽が照りつけていれば私は愛したり抱きしめたいくなるのだ。光にもぐりこむように肉体にもぐりこみ、肉体と太陽の湯浴みをしたいくなるのだ。」

《Quand il est dans la lumière, quand le soleil tape, j' ai envie d' aimer, de me coucher dans des corps comme chez lumières, de prendre un bain de chair et de soleil.》⁽⁵⁾

「空や空から降り降りてくる光まばゆい熱気を前にすると、絶望も喜びも、私には何一つ根拠のないものに思えてくる。」

《Ni le désespoir ni les joies ne me paraissent fondés en face de ce ciel et de la touffeur lumineuse qui en descend.》⁽⁶⁾

おしみなく降り注ぐこの光の富を前にし、自然の壮麗さに取り付かれた彼は貧困と醜悪、屈辱や怨恨などの苦悩、死の観念とか失望から解放されたような気持ちになることも少なくなかったようだ。その上日中の陽光が夕日へと移行していく時間に同じ感覚的充足を通してではあっても、郷愁の念で瞑想することもあったようだ。夕日は「フォルムを強く打ち出し色彩を強く際立たせ」《il souligne les formes, accentue les couleurs》⁽⁷⁾ 又光の強弱とか明暗の対照の推移を微妙に残しつつ展開する夕映えの風景は日中から夜への移行現象であり、一種のロマンチックなひと時であり、Vicence(ヴィサンス)での夕暮れのように肺病に苦しむ彼の孤独を「女性的で母親のように」《Le soir est féminin, maternel》⁽⁸⁾ 優しくつつんでくれたようだ。それだけに彼はこの風景を素朴な感嘆の念で眺めながらその甘美な世界に陶醉し心の中にこみ上げてくる純真な気持ちを率直に言ったのだろう。

「夕方湾に映えるこの世界はなんと甘美な眺めだろう。今日の夕方、世界は真実を告げている。それもなんとという執拗な美しさで。」

《Au soir, douceur du monde sur la baie — Il y a…… des jours où il dit vrai. Il dit vrai, ce soir — et avec quelle insistance et triste beauté.》⁽⁹⁾

しかしカミュは哲学的・宗教的題目に精神を集中し沈思熟考の中での自己完成を目ざすタイプの人間ではなく、精神的自分自身から脱出したようになって、肉体とか感覚中心の自分自身を光の世界の中に組み込んで青春のエネルギーの「組織的燃焼」と生の高揚に人生の大きな意義を見出していた。この象徴的出来事が「チパザでの婚礼」にある。

彼は 1935 年と 1936 年の間にアルジェ西方 70 キロメートル位のところにある地中海沿岸のチパザという村をひんぱんに訪問した。そこは自然そのものが支配しているところで、春でも大地は強烈な太陽の光を受けかつその熱を放射して、大気は「巨大な熱気」《la chaleur énorme》に包まれ、昼はそこは真夏のように酷熱の大地と化す。それでもここに自生する草花は暑さと乾燥に耐えるたくましさをにない、強烈な太陽の光とむせかえるような熱気に耐えながらも強い色彩と芳香をかもし出す。チパザの別荘の塀からのぞくブーゲンビリア（赤）のバラの匂い、花壇に咲きほこるアイリス（あやめ属、青）庭にはハイビスカスやあるいは岡の上の廃墟にある乳香樹とかえにしだ（黄）に目を奪われ、そこにあるのがよもぎ（灰）の野原におしみなく降り注ぐ強烈な光を浴び、熱気でむせかえるかのように灰色の綿毛からアルコールの蒸気が大気にゆらめきつつ立ちこめる。廃墟の中に入ると「広場の舗石」《les dalles du forum》の間に生えているヘリオトロープ（白）やジェラニウム（赤）が彼の眼を打った。強烈な太陽の光と大地のむせ返るような「巨大な熱気」を受けて草花や灌木の色彩と芳香は炸裂した。こうして過度にまで膨れ上がった感覚世界に彼の身体感覚・呼吸感覚は圧倒されながらも、彼の視覚、嗅覚はそれでもこの世界に浸っていく。それにつれて高まり激しくなった感覚器官全体でもって、彼はこれらの植物を介して大地から大気へと発散される「大地の精気」《des essences de la terre》を受け止め、その後太陽の光と熱にさらされた結果生じたこの「大地の精気」を水泳することによって大地から海に引き渡した。彼は「かくも長い間大地と海とが唇と唇を重ねて恋い慕ってきた抱擁」《— l'étreinte pour laquelle soupirent lèvres à lèvres, depuis si longtemps》⁽¹⁰⁾の仲介役となるべく「植物世界の発酵、光の喧騒、芳香の激しさ、色彩の叫び」《la fermentation du monde végétal, le tumulte des lumières, la véhémence des parfums et le cri des couleurs》⁽¹¹⁾がなされた時、この光と色彩の幻惑的激しさに共時感覚的に高進した彼の視覚、嗅覚、聴覚が充分につかり、あたかも彼自身自分の身体感覚含めこれらの感覚器官から構成されたようになりながら、青春の躍動する自分のエネルギーを燃焼させた。つまり大地の植物が太陽の光と熱を吸収して発酵した結果生じた「大地の精気」を彼の肉体と感覚で受けとめて後海水浴することによって大地と海との汎神論的融合を叶えさせようとする彼の発想には、彼の肉体と感覚の「組織的燃焼」を通じて自然の大きな構成要素である大地と海を合体させようという姿勢が窺われるし、同時に一回限りの自分の人生の生の充実を即座にくみとろうとする意志と情熱が超越的な靈魂のようになって宇宙の神秘との一体感を体得しようと一気にそこへ上昇して昇華しようとするプロチノスの合体志向もこの姿勢の背後にこめられているようだ。しかしながらこの宇宙、すなわちこの形而上的世界は彼のこの合体志向をかなえてくれない時のほうが多かったようだ。

この「世界」は感覚的充足とか感動あるいは心情のうるおい(慰安)を時には否定し、不安とか絶望を与え死の陰影を刻むところであったようだ。

「八月の荒れ模様の空。焼けるような暑い風が吹いている。黒い雲。だが東の方に、青いえもいえぬ美しい透明な空が帯のようにひろがっている。その空を見つめていることはできない。その存在は、目と魂にとまどいを覚えさせる。美は耐えがたいからだ。できれば時間の流れに沿って無限にひきのばしたいと思うこの一瞬の永遠性が、僕らを絶望にかりたてる。」

《A l'est pourtant, une bande bleue, délicate, transparente. Impossible de la regarder. Sa présence est une gêne pour les yeux et pour l'âme. C'est que la beauté est insupportable. Elle nous désespère, éternité d'une minute que nous voudrions étirer tout le long du temps.》⁽¹²⁾

広大無限に見える天空の美しさを前にした瞬間カミュはこの上ない開放感をあたえてくれるかのような一瞬の永遠性の幻惑にとらわれたのかもしれない。しかしそこは彼自身を飲みこんでしまう程の深遠さをたたえた美しさが、彼の眼や魂を弾き返してしまうほど強烈だったので、その壮絶な美しさが耐えがたいものになった。その時彼自身「一瞬の永遠性」であろうとしたそれまでの願望が一瞬というはかなく空しい存在である自分自身への絶望によって代わられたのだらう。その絶望は死の意識に連なるのだが、しかし一方では生の持続の意識にのって彼は「持続する空を見つめる」《contempler le ciel qui dure》⁽¹³⁾ ことによって時間的永続性を超越的に願望したようだ。こうして彼は生の持続の意識の中で強引にも「世界」に接近しその一部にさえなろうとしながら、神と崇めたこの「世界」に自己昇華までしようとした。そこは生を限界づけ生の最終時点での死が待ち受けているところではなく、始源の時点から死もない代わりに生もない、死も生も否定されたところすなわち人間の実存とか人間性が否定された世界なのである。空間的無限性とか時間的永遠性をかねそなえたような天空に、生も死も否定された世界が存在し、彼はこの世界こそ非人間的荘重さとこの上ない威厳をそなえている神聖な領域と受けとめていたようだ。以上のように特徴づけられる「世界」は同じくこれまた彼の青春時代の諸作品、とりわけ『婚礼』、『シジフォスの神話』、『幸福な死』、『異邦人』あるいは彼の創作ノート『カルネ』等に顕著に認められる自己石化志向と同類であり、後者は前者に到達する手段ともなっている。このことを検討する前に彼の自己石化志向とはどのような特性をになっているものかを考察してみよう。

2. 自己石化志向の意義と「世界」について

太陽の強烈な熱と光にさらされ続けた結果としての自然は、極端な少雨という条件が重なって、無数の砂、小石あるいは岩石からなる砂漠と化す。砂漠は太陽によって「引き裂かれ焼き尽くされた」《déchirée et brûlée》⁽¹⁴⁾ 結果としての不毛の大地といえる。しかも石は岩石を含めても砂漠以外に地球上に無数に存在していて、この石は生命力も生の機能もない無機物的物質であるから水を全く必要としないし、その上長年の風雨にさらされ風化作用の影響を受けてやがて腐敗・解

体し、人間が寿命がつきるように、生→壮→老→死という循環的事象を繰り返すその種類が数え切れないほど多い生物群と比較してもその変化・変質はわずかで目立ちにくい。つまり石はその機能が無機的であることにより生命をもたないから生も死もないことになり、この点で「世界」と同類であるし、こういう石のになう本質が我われの心の中に何の反応も何の変化もしにくいという比喩的特性として無反応性、不変化性という観念とか意識内容を生じさせる。それに石は不毛な砂漠の構成要素にふさわしく石自体からは何も生じない、生み出されにくいという点で、砂漠のような不毛性という観念・意識内容も抱かれ易い。しかしながら我われの日常の身近なところにある石を含めて石自体は、人間の肉体とは本質的に相容れない異次元の異質な物質であり感覚的・生理的に排斥され易いが故に心情的・心理的にも受け入れにくい異和感を与える物質であるし、又無数に転がっている石ころのイメージに象徴されるように石は全くつまらない余計物として黙殺されてその存在価値が無に等しい物になる時は、石のイメージとしての比喩的特性は考慮されにくくなる。石のイメージに無反応性、不変化性、不毛性のような比喩的特性が与えられる時は石ころとして無視される対象より小石として否定的にでもその存在価値が認められた時であろう。何故なら人間の心の中に強くひそんでいる否定的感情とか排除の論理で人間社会の物事・人事が否定的に捉えられ、元々存在したり発生したりしなければよかったという事で、結果として何もない無の世界をよしとして、何の変化も反応もない、そこからは何も生じない小石のような物質に無の存在意義を託したくなるからである。勿論我々の心は意識の流れとか感情の変化を含めて血液が絶えず身体中を流れたり、心臓が絶えず鼓動したりしているように動的状態にあり常に一定の状態を保っているわけではない。であるから同一の人間でも無反応性、不変化性、不毛性といった生もなければ死もない無の世界の存在意義を小石にいつも託しているわけではない。小石が単なる石ころと違って砂や砂利とともにコンクリートによる道路舗装に利用されたり川原の景観の興趣をそえたりして小石に対する関心の度合いもその存在価値も増してきたりするだろう。そのうえ山を構成したりその一部となったりする時の大きな石の置物としての岩とか庭園に組み込まれて石庭を構成したりする時の石は重々しくどっしりと安定して、かつ深々と沈黙しているような比喩的意味をになった印象を与えてくれる。

こういう時の石(岩)の心の中に思い浮かべるイメージとかそれに対する反応(観念・意識内容)はその永続性だけでなく重量感ある安定性から荘重性なり不動性なりへとその存在価値はゼロから明確には限定できないままに上昇拡大して大きな関心の対象となりその存在価値も高くなるだろうからである。こういう訳で石はその姿・形や重量の相違によって関心の度合いや存在価値も変動しやすいものであることが理合されるだろう。簡約すると以下になるだろう。

○ 石のイメージ

石ころ 小石(石、砂利、砂) 岩石

○ 石の特性(石に対する観念、意識内容)

(無反応性) 無反応性 安定性

(不変性)	不変性	永続性
(不毛性)	不毛性	不動性
(永続性)	永続性	壮重性

○ 石の存在価値

ゼロ ← 中間の状態 → 大
(下降減少) (上昇拡大)

但しこれらの石の諸特性は相対的なもので、かつ石が本質的にその機能が無機的であることから生ずる無反応性、不変性、不毛性といった我々の心の中で意識する対石への観念は岩石への観念にも共通にあてはまるものだし、又このことは対石ころについても共通にあてはまることが指摘できるのだが、岩石の場合は普通の石よりはるかに重々しく安定してるだけでなく深々と沈黙しているような様態の中であってそれだけその安定性、壮重性のニュアンスが強いことが指摘できるし、同時に石ころの場合はこれまで取り上げてきた諸特性の中の無反応性、不変性、不毛性のニュアンスが、その存在価値がゼロとして無視されたり、少なくとも軽視されるべくただの物質に過ぎないことから、これ等三つの特性も無視とか軽視され意識内容として心に殆ど残らないだろう。一方岩石の場合は本質的に石であることに変わりないから、石共通の特性である無反応性、不変性、不毛性をも有しているが、岩石自体の特性である壮重性とか安定性のニュアンスも付け加わり、むしろ後者のニュアンスの方がより増強された意識内容となるだろう。それに対して石ころの方は岩石特有の壮重性とか安定性の観念とかそのニュアンスは全く感知されないだろう。

永続性のニュアンスは石自体非常に密度の高い堅固な物質であるから強烈な太陽の光にさらされ続けてもその原形は最も長く持続して保たれうるという点で、石ころ、小石、岩石ともども共通になっているニュアンスと受け取ることができるだろう。

不動性は非常に頑丈でどこでも動かない重々しい岩石こそ、その安定性、永続性、壮重性の特性とあいまってになっているもので、石ころや小石にこの特性をそれ程感知できないことは明白であろう。

カミュの自己石化志向も単なる石のイメージとか観念を心の片隅にとどめおくだけでなく、以上指摘した石の諸特性への自己転化の願望とか意志が託されていたようだ。

彼が「チパザの廃墟そのものを愛し、そこにやってきたのはその碑文を読み取るためだけでなく、廃墟の現存、その石のためであり」「世界はいつも歴史に打ち勝つ」⁽¹⁵⁾ という教訓を確認するためであったようだ。事実彼は古代ローマの廃墟が残り、石塊とか石柱の支配するジェミラの岡で吹き荒れる風に身をさらしながら「風に磨かれ魂まですりへらして」⁽¹⁶⁾ 自分を風の中にまめこまれたようになって石への自己転化をはかった。しかし彼の自己石化志向は彼自身心底から石に同化しようという意志とか願望を示唆する、そういう心的傾向を意味するものではなく、自己離脱志向の力動的展開の中で自己を拡散しながら、石を中心とした自然へ同化したようなもの

う一つの自分自身を仮想することである。

血液とか心臓の鼓動する生身の彼自身の意志とか願望が石の比喩的イメージとかそこから派生する観念とか意識内容に同化しようとしているのであり、そういう心的状態で石の孤独と沈黙にひたるのである。

「僕はそれによって自分が漂っていたあの力の一部だった。ついでその大部分になった。そしてとうとうその力になりきってしまった。その力は僕の血液の鼓動と、自然のいたるところに現れているあの心臓の力強い響きをかき混ぜていた。そしてそのつかの間の抱擁は、小石の中の小石である僕に一本の石柱の孤独やあの夏の空の一本のオリーブの木の孤独をあたえてくれるのだった。」

《J' étais un peu de cette force selon laquelle je flottais, puis beaucoup, puis elle enfin, confondant les battements de mon sang et les grands coups sonore de ce coeur partout présent de la nature. ……Et sa fugitive étreinte me donnait, pierre parmi les pierres, la solitude d' une colonne ou d' un olivier dans le ciel d' été》⁽¹⁷⁾

そしてまるで自己消尽するかのように「全生命力を使い果たす。」《épuisait toutes mes forces de vie.》このジェミラの風の中で「世界の四隅に拡散され、自分を忘れ、自分からも忘れられて風となり、この風の中でこの熱っぽい感じのする円柱やアーチ(迫持)、敷石になり、人気のない町を取り囲む青白い山々になる」《……répandu aux quatre coins du monde, oublieux, oublié de moi-même, je suis ce vent et dans le vent, ces colonnes et cet arc, ces dalles qui sentent chaud et ces montagnes pâles autour de la ville déserte.》⁽¹⁸⁾ その時彼は「自分自身からの離脱」《mon détachement de moi-même.》⁽¹⁹⁾ と「世界での自分の現存」《ma présence au monde》⁽²⁰⁾ を同時に感知したようだ。

すなわち彼の自己石化志向は生身の自分自身の生のエネルギーの自分を忘れるほどの力動的展開と自己放棄の中で本来の自己を離脱し、無機的な石、つまりその機能は無反応で不変化で堅固な石への転化願望であり、その願望を成就させようとする意志なのである。

こうして彼は自己石化志向によって意志の無反応で不変化な特性を自分自身の中に取り込み、生もなければ死もない次元では石と同類の「世界」に接近し「世界」の一部になろうとしたのであるが、この「世界」を神聖視することによって、非人間的で荘重なこの「世界」が全てに優先し、それ故いかに不条理な人生であろうとも孤高な自己存在の意義を賭けて生きるに十分ふさわしいものであった。

光の世界の元で大地と海の婚礼に自分自身を捧げた時も、そこに感覚的に充足するだけでなく感覚とか肉体優先の自分自身を光の世界へ昇華させようとした時も、力動のエネルギーを自分の心身に蓄積させるよりもそれを燃焼させることが重要であった。又前述のように自己石化志向によって「世界」を前に現存する時も力動のエネルギーの燃焼がはかられたのだが、結局生もなければ死もない次元の無を告知するこの「世界」に自分自身を同化させるべく死によって限界づけ

られた自らの生を自己消尽させるほどエネルギーの燃焼をはかりながら生きなければいけなかった。そして時には感覚と肉体優先の自分を純真かつ傲慢に光の世界に自己没入をしながら青春の躍動するエネルギーの燃焼をはかって一気に、人間存在を超越する光の世界へプロチノスの合体志向でもって昇華しようとしたのだが、「世界」を意識している彼は死と隣り合わせの生に自分自身を位置づけようとしていた。又石の沈黙と孤独とともに限界ある自らの生の重みを実感しながら、かつ石のような堅忍不拔の意志でもって自らの死を早めてでも力強く男らしく生きながら非人間的莊重な「世界」に自分自身を連れようとしたようだ。

カミュにとり「死は確実である。しかも死は絶対の悪である。なぜなら肉体の生命こそ唯一のゆるぎない善であるから。しかしこの死すべき条件をはっきり受け入れることによって、人間はみずからに許されている唯一の喜び、すなわち自己の生存を即座に享受することができる。それは死と不幸に対する諦めよりも、むしろ生命力の組織的燃焼であり、宇宙と精神の結合よりも、むしろ宇宙と肉体との結合である。しかも希望は締め出されている。なぜなら、希望は恐れと同類であるから。」《la mort est certaine, et elle est le mal absolu puisque la vie corporelle est le seul bien incontestable; mais c'est l'acceptation lucide de sa condition mortelle qui livre l'homme à la seule joie qui lui soit permise, la jouissance immédiate de son être. Non pas tant résignation à la mort et au malheur qu'épuisement systématique de la vie; non pas tant adhésion de l'esprit qu'adhérence du corps à l'univers; et l'espérance exclue, parce qu'elle est soeur de la crainte.》⁽²¹⁾

死によって限界づけられた生を汲みつくし、「生命力の組織的燃焼」をはかる事が青春の特権であるのだから。そしてこの死と表裏する生の重みに耐えうるような意志と努力を重ねながら生きていく、それも生も死も超越しかつ生も死もない「世界」の側に自分自身を位置づけることによって、最も奥深い世界の存在意義を感知することが全てに優先しなければいけなかったようだ。

果たしてカミュは非人間的莊重さを伝えるこの「世界」に、生にも死にも拘束され苦悩する人間を自分を含めて解放してくれることを願望したであろうか。既述したように、石の個々の特性とか我々の心のうちなる意識内容として指摘した永続性とか不動性を彼の自己石化志向から締め出すことができないように、この願望を彼は抱かなかつたと断言することはできない。「世界」への「持続の意識」は永続性とか不動性に連なるものであるのだから。しかしながらこの「世界」では人間存在が根本的に否定され、人間的感情、心情そして精神まで否定されているのである。だからこそ、逆説的にこの世界は非人間的莊重な美しさでもって彼の心を捉えたのだ。

「世界は美しい。そして全てはそこにある。その風景が辛抱強く訓えてくれた偉大な真実とは、精神はなにものでもなく、心情もまた然りということだ。そして、太陽が暖める石や、ぽっかりとのぞいた空にすくすくと伸びる糸杉こそ、《道理がある》ということが意味をもつ唯一の世界を限定しているのだ。そしてその意味とは、《人間なき自然》ということだ。この世界は私を空しくししまう。それは私をとことんまで運んでいく。そして怒りもなく私を否定す

る。」

《Le monde est beau et tout est là. Sa grande vérité que patiemment il enseigne, c'est que l'esprit n'est rien ni le coeur même. Et que la pierre que le soleil chauffe, ou le cyprès que le ciel découvert agrandit, limitent le seul monde où 《avoir raison》 prend un sens: la nature sans hommes. Ce monde m'annule. Il me porte jusqu'au bout. Il me nie sans colère.》⁽²²⁾

又そこは「精神の否定自体の真理が生まれるために精神が死ぬ場所」《Il est des lieux où meurt l'esprit pour que naisse une vérité qui est sa négation même.》⁽²³⁾ともなる。

人間的なものとか人間の本質まで否定する、それが「世界」の真実なのだとカミュは、神を崇めるようにそう信じている。であるから人間の主要で基本的な存立条件である心情はもとより、自己存在意識でありかつ自分自身を有意義に価値つけようとする自己向上作用が生じるところの精神の存在まで否定するのであるから、彼の「世界」志向とか自己石化志向からは、既述したように生もなく死もない世界への自己転化の願望とか意志だけでなく、人間存在を否定視する傾向も強く窺われる。とりわけ、知性や理性と深くかかわり自己形成の場である精神を軽視し、愛とか愛の裏にひそむ憎悪や愛の派生である情念（嫉妬、対抗心、軽蔑の念等）あるいは心の重荷、責任感、良心の呵責等の人間的感情は欠如しているか麻痺しているような人物がムルソー、メルソーの様に彼の小説の主人公として登場する。彼らも「世界」志向とか自己石化志向を抱いており、出来るだけ非人間的にかつ非社会的になることに自らの孤高な自尊心を賭けて生きた。それだけ彼らは超俗的なものの考え方、生き方をし、社会に頑固なまでの反抗心を抱いていたともいえるだろう。この事は又彼らの無関心な態度とかニヒルな言動に反映しているのである。そして彼らは悠久な自然の摂理に公正厳密な「世界」の真実を認める余りに、文明的価値に背を向け、社会に反抗して非人間的に生きるべく殺人まで犯して、その罪の代償に与えられた自らの生を死に急ぐ不条理な人間であったのである。次に彼らの言動や心理中心に具体的に検討することによって、カミュの青春の思想の軸となった「世界」志向とか自己石化志向が彼ら作中人物をどのように支配していたかを明らかにしよう。

3. 作中人物に認められる「世界」志向と石化志向

—— ムルソーとメルソー中心に ——

作者同様太陽と海を愛したムルソーは光とか色、匂いに敏感に反応し、感覚的充足を好む。そして平凡で単純な生活を甘受しながら自由気ままに生きるし、一介のしがない労働者のレイモンへの仲間意識とか人の良さ、あるいは失われた者（母親を含む）への郷愁の念とか慕情は抱いている。しかし自分の母親の死には涙を流すこともなく又彼女の墓に黙祷を捧げることも煩わしがってせず、この葬儀の一日は何事もなかったと平然と受けとめる。恋人の筈のマリイから愛しているかどうか尋ねられても多分愛していないだろうとこれまた平然と答える。その上社長の申

し出を断ってパリの新事務所で働いて出世しようという野心も示さない。確かに愛情とか利得心は心理的抵抗とか羞恥心が働いて普段はストレートに表現しにくいものではあっても、自己保存本能とか生理的欲求のように抑圧できないままに人間の心の中に宿っているものだろう。それなのにムルソーは作者によって個人的幸福の重要な構成要素である愛とか出世に無関心な男として打ち出されている。それだけ彼は自分の幸福を抑圧しそれに反抗しながら生きているのであり、その分自分の本心を隠しているのだ。彼の無味乾燥で冷たい無関心の中には、世をすねた感じの陰湿さが影を落としているようだ。その彼が仲間のレイモンの情婦のことに係わり合い、殺害の意図がなかったにもかかわらず相手のアラブ人を殺してしまう。しかし自分の犯したこの犯罪に対する自責の念もなければそのことを後悔もしない。つまり彼はそれだけ責任感とか良心の呵責が麻痺したように非人間的になっており、そういう人間的感情に超然とした存在になっているのだ。その上太陽の強烈な光のせいもあったにせよ、倒れた相手に拳銃で四発も撃つ加虐性はそのまま自分自身にも向けられていて、「自己正当化しない男」を裏書するように彼は自己破滅に至るほど自虐的でもあり、最後は「……僕はただ処刑される日に大勢見物人がいて、僕を憎悪の叫びで迎えてくれることを望めばよい。」《……, il me restait à souhaiter qu'il y ait beaucoup de spectateurs le jour de mon exécution et qu'ils m'accueillent avec des cris de haine.》⁽²⁴⁾のような精神状態になる。

つまり自分の本心を超越するような彼の尊大さが彼に死刑囚として死んでいく道を選ばせ、そして死に相對した時になって初めて彼をして「世界」の真実を「世界の優しい無関心」《le tendre indifférence du monde》の形で受け入れさせたのだろう。こうして彼は自らの死によって世界の真実の中に入って行くのである。この事から彼の「世界」志向性が彼の死を超越するような尊大な孤高性と調和するものであることが窺い知れる。同時にまた非人間的な「世界」に同化したような彼の非人間性は、この処刑の時だけでなく、母親の葬儀の際に示した彼の無関心な態度に対して彼が裁判で不利な立場にならないようにという配慮から彼の弁護士が母親への愛情とか悲しみを彼自身抑圧していたのでそういう態度になったのだと言っていいかどうかという問いに対して実はそんな気持ちはなかったという彼の答からも理會される。しかしながらこの性格は頑固であればあるほど、つまり頑固な恒常性を帯びれば帯びるほどそれだけ常識とか社会通念、理性や人間性を重視する社会（法廷）からは理解されないだけでなく、そこから葬り去られる運命にあることがこの作品では示唆される。それにもかかわらず社会に反抗しながら生きる彼の反社会的性格は彼をして社会や自分の幸福を含めた世俗的幸福に対して無関心な態度をとらせるのであり、それも石のような頑固な「沈黙」と「無関心」を見習うべくあの石の特性である無反応性、不変化性、不毛性を部分的に自らに取り込んでいるかのように彼自身既に石化したような側面になっている。何故なら、しがたい会社員である彼は単調な日々を野心もなく自覚・反省もないまま受身の姿勢で生活しているが、彼と同じように感覚とか肉体中心の自然で単純な生き方をしているレイモン、セレストそれにマリーに同情や仲間意識は抱いているとはいえ、人間の根源的

感情とか欲望の一種である愛とか野心あるいは理性と調和する社会通念（常識）とかモラルに対しては反抗的に抑圧しながら心を閉ざして、心を動かしたり反応を示したりすることのない所謂無関心、無感動で無味乾燥な人間の側面を担っているからである。もし彼が物事にあまり拘らない、あっさりして淡泊な人間であったなら同じ無関心型の人間ではあっても、愛とか野心、あるいは社会（法定）を心の中で強く意識したり、対立・反発したり抑圧したりする自己矛盾に陥ったりして結果的に自虐的・加虐的になって自分で自分の首を絞めるような死刑囚の道歩むことはなかったろうし、物事にもっと柔軟に対処できたであろう。本能の次元である官能は受け入れながら同類の次元の自己保存の欲求にあい通じる自分の将来に対する夢とか希望は頑固に拒絶するという不自然で窮屈な彼の考え方や生き方は、愛とか利得心にからんだ人間関係や社会（法廷）に反抗しながら超然とした態度・言動をとる彼の基本姿勢にも示唆されているし、その上愛と憎悪、敬意と軽蔑、希望と不安等の「反対感情の共存とか生の微妙なニュアンスもなく」《sans nuance vitale, sans l'ambivalence de la terre》⁽²⁵⁾ 人間間の矛盾（対立・葛藤）とか繊細微妙な内面の心理にも「自己正当化しない」までに超然としていて、それ故融通のきかない人間でもあるのだ。

石は感覚、感情、心理、理性、精神や思想は全く無く、そういう人間的側面に対して全く頑固にも閉鎖的である。石はどこまでも石であり、人間とは完全に断絶しているが、人間のほうは石に対して現実の石の外形・実質そのままに非常に密度の高い堅固な物質とだけは受け取らないで、既述したように石のイメージとかその観念（意識内容）を心の中に保とうとする。であるから彼は石のような人間だと捉える時は頑固な沈黙を守って人間的側面を拒絶し、そこにあくまで閉鎖的であり、反応もせず動ぜず、建設的なものは何も生み出さないほど不毛性をになっていると解釈できるだろう。であるからムルソーは意図的に自己石化しようとした人間ではなくとも、石の諸特性が彼の無関心で超然としたそしてニヒルな態度・言動に反映していることは指摘できるだろうし、又彼の「世界」志向性がそこへ超脱的に自己昇華の願望と意志を託することであり、この「世界」を強く意識した彼のこれまた超脱的で非人間的な生き方、考え方が彼をして死刑囚として自らの死を早める不条理な生を敢えてさせたのであり、石の諸特性を担ったような態度・言動を結果的にとらせたのだらうと受け取ることは可能だろう。

一方メルソーも「非人間的に徹すること」《m'appliquer à l'impersonnalité》⁽²⁶⁾、「幸福にならず反抗すること」《ne pas être heureux, contre》⁽²⁷⁾に捉われていて、彼はムルソー程世俗的幸福は否定してないにせよ、彼はその幸福を目標にして生きているのではない。結果的にそれを否定し、世俗的幸福な生き方に反抗しながら生きているのだ。このことを筋を辿りながら追ってみよう。

肺を病み発病し衰弱し易い体をかかえている彼は、死の不安に悩みながらも自分の運命（死）を諦念と自己放棄でもって受け入れるのに最もふさわしい生き方をしようとする。彼はムルソー同様官能を受け入れるし、ダンスホールのホステスやザグルーの情婦マルタと関係したり、「世界

を前にした家」《la maison devant le monde》で三人の女子学生の愛に囲まれながらの共同生活を享受する。彼は八時間労働の残りの自由を享受するのではなく、労働しないですむような自由を勝ち得ようとしていた。そして幸福になるための自由を享受できるにふさわしい金銭が必要なことをザグルーから啓発されたこともあって、両脚なくした不具者で金持ちのこの人物を殺害する。つまりザグルー自身両脚切断という悲運に遭遇して以来生きる情熱を失い不自由で肩身の狭い思いをして自殺したいという告白を彼の別荘でメルソーは彼から直接聞いていたので、この事が殺害の動機の一つになってはいるのだが。

犯行時彼はザグルーの金庫にある札束をスーツケースにしまい、この殺害から一週間後マルセイユからリヨンへ向かい、そこから中央ヨーロッパへと逃亡するが発熱し体も衰弱し気分も悪くなり孤独と不安を体験する。プラハを逃げるように去って、ボヘミアやシレジアを走る列車内で雨模様や雨降りの暗い風景を前に彼の心は再度憂鬱や不安に閉ざされる。そして人生に失望するようになる。その後北イタリアを通過しジェノヴァからアルジェへと帰途の旅をしていくうちに太陽の光をうけて明るく輝く風景が展開するようになって彼の心も明るく和むようになった。

「清らかに大地にすっと立っている最初の糸杉を目にした時、彼の心はくじけてしまった。彼は再び自分の衰弱と発熱を感じていた。けれども彼の中には何かがすでになごみ、弛緩していた。まもなく太陽が一日の中で歩を進め、海が間近になるにつれ、きらめき弾むような大空の下で——そしてその空からは空気と光の波が、震えているオリーブ林の上を流れていたが——世界を動かすあの昂揚が彼の心の熱烈な動きと一つになるのだった。」

《Des le premier cypress, droit sur la terre, il avait cédé. Il sentait encore sa faiblesse et sa fièvre. Mais quelque chose en lui avait molli, s'était défendu. Bientôt, à mesure que le soleil avançait dans la journée et qu'approchait la mer, sous le grand ciel rutilant et bondissant d'où coulait sur les oliviers frémissants des fleuves d'air et de lumière, l'exaltation qui remuait le monde rejoignit l'enthousiasme de son coeur.》⁽²⁸⁾

しかしこの時の彼にはチバザでの大地と海との汎神論的融合をかなえた時のような心身のエネルギーの「組織的燃焼」はなされず、この地中海的自然の光輝の中に自分自身を組み込んで、この自然との雄々しい愛にみ合った純粋に誇りある生の歓喜と情熱を謳歌したのではなく、「このような自然崇拜主義的陶醉の賛歌、このような生命への強烈な賛辞」《……ce cantique d'ivresse naturaliste, cet hymne orgiaque à la vie;》⁽²⁹⁾ がいくら感覚的に高揚し心が開放されている時でも、その意識の流れの中に生理的欲求同様官能のこ惑もひそんでいる事が窺われる。

「空と海では、欲望と倦怠が暮れ方まで闘っていた。彼は愛することとお享楽することと抱擁することに渴き、かつ飢えていた。」

《……ou luttèrent jusqu'au soir le désir et la paresse. Il avait soif, faim d'aimer, de jouir et d'embrasser.》⁽³⁰⁾

「彼の欲望自体は、また彼女の肉体の深い味わいは、多分ことさらに美しい一つの肉体を所有

し、それを支配し、それを凌辱する当初の驚きから生まれてくるのだった。」

《Son désir même, le goût profond de toute sa chair venait peut-être de cet étonnement du début à posséder un corps particulièrement beau, à le dominer et à l'humilier.》⁽³¹⁾

適度な緊張の元で、官能を抑制し心身に節度ある均衡を保っている時だけでなく、心身が官能の充足へと向かう節度のない状態に於いても生の高揚がなされて「世界」との一致がなされ易いことに注意しよう。

アルジェに帰った彼は湾を見晴らす高地にある「世界を前にした家」で知り合いの三女子学生との共同生活に平穏な日々を送るが、そこはオリーブ林に囲まれ、野原には乳香樹、野バラ、ミモザ、すいかずらが咲きほこり、花の香りもただよい、松林、糸杉、オリーブ、ユーカリが生えていて自然の支配するところだ。女友達の一人、カトリーヌにとって「世界」との一致は、樹木、海、風の深遠な言葉をよく理解し、自然の摂理にふれることによってなされるが、メルソーにとってそれは自分自身の最も内奥にあるものとの一致なのである。以前彼はある時は雨に打たれて冷やされ、またある時は太陽に熱せられて熱くなる小石に石の幸福を見出したことがある。すなわち幸福とは生のない小石、本来無機格的であるが故にあの不変化性、無反応性あるいは不毛性といった特性をになっている小石が太陽や雨によって熱くなったり冷たくなったりしてまるで生き物のように、全く受身のままながら変化し反応するというその状態の変化自体からいって、何も生じないとは言い切れないところに感動する。こうして生のない小石の有様に自分の夢と願望を託す。

そして生のない小石のような存在でありながら微妙なニュアンスをになって生き、自然の一部を構成している状態でありたいと思ったようだ。彼が「世界を前にした家」を出立してチパザの廃墟から数キロメートルのところにあるシェヌーアに別荘を購入してそこで隠遁生活を送ったのは小石のような存在とその状態の変化を自らに表現しようという願望と意志があったからではなかったのか。それに生のある自分が生のない小石のようになるとすれば現実の自らの生と袂を分かつように死ななければいけない。それも生のない存在であることを彼自ら強く意識し求めているのであれば生きながらえて自然の死を待つのではなく、自殺かザグルーのように他人（メルソー）によって殺されるしかないだろう。こうして彼は自らの死期を早めるような自虐的な生き方をするのであるが、死ぬまでの間生のない石のような存在であるかのように、人生にありがちな人間間の対立・葛藤に巻き込まれることなく、情念や感情、人間性やモラルにとらわれることの無い非人間的な生き方をする。そして彼も又生の拡大したエネルギーの燃焼を図り自らの死を賭けるくらい昂進した自己蕩尽へと自分を導いていく。

肋膜炎を患いながらも彼は三人の女友達とシェヌーアの山へ登るのだが、そのきつい斜面に打ち勝とうとして汗だくになりながらも登攀しつづけているうちに、疲労と酷暑で山頂に到達するのを断念するのだが、ついに失神してしまう。そしてしばらくして後に彼は夜間水泳をするという冒険もする。その時彼は岸边から次第に離れていくうち呼吸は荒々しく切なくなり、少しでも油断すると水を飲み溺れ死んでしまいそうになる。こうして死の危険と隣り合わせの疲労困憊

の状態になるまでにいたった時、彼は死の恐怖から本能的に身を翻すように泳ぎながら引き返している間に「世界」を感じた。その時彼は突然冷たい水流に入っていて、「歯はカチカチし動作はばらばらになって」《claquant des dents et les gestes désaccordés》⁽³²⁾

彼の神経は麻痺し全身無力状態に近づいたが、必死になって全身の体力・気力をふりしぼってエネルギーの燃焼をはかった時でもあった。結局溺死こそまぬがれたものの、この時の無謀な水泳がたたって彼は死の床にふすことになった。そしてついに死んで行く時も余力少ない生のエネルギーの燃焼を図って彼は死と格闘する。そして最後には「石の中の石となり、不動の世界の真実に彼の心は歓喜して帰っていった。」《Et pierre parmi pierre, il retouna dans la joie de son coeur à la vérité des mondes immobiles.》⁽³³⁾

この死の間際に於いて彼は小石つまり石ころのような全く無意味そのものと自分が化すことによって、生もなく死もない虚無を告げる「世界」に自分自身を連ねようとする一種の自己無化志向が彼の中にあったとも受けとれるが、同時にこの生から死へのめくりめくような転落の中にあってなおかつ石とかその背後にある「世界」の不動性へと自分自身を反転させて自己石化志向の高揚の中に何物にも動じないという石の不動性を自分に組み込みながら「世界」へ向かって超越的上昇のベクトルのエネルギーを燃焼させようとしたことも否定できない。事実カミュ自身も不断のたゆまぬ努力と節度によって不動性への傾斜を自分自身に認めていたようだ。

「絶えざる努力によって私は創造できる。私は不動性に赴く傾きがある。私の最も深く最も確実な傾斜は、沈黙と日々の行為だ。憂さ晴らしや、ありきたりの幻惑から逃れるには、私には片意地な数年間が必要だった。この努力自体によって私は立っていられたのだし、また私がたった一瞬たりともそう信じることをやめてしまえば、私は絶壁を転げ落ちるだろうことも承知している。」

《C'est par un continuel effort que je puis créer. Ma tendance est de rouler à l'immobilité. Ma pente la plus profonde, la plus sûre, c'est le silence et le geste quotidien. Pour échapper au divertissement, à la fascination du machinal, il m'a fallu des années d'obstination. Mais je sais que je me tiens debout par cet effort même et que si je cessais un seul instant d'y croire, je roulerais dans la précipice.》⁽³⁴⁾

この不動性は自己統制の中から精神を集中し、不安その他の雑念に捉われることのない安定した平静な心を意味しているようだが、常時そのような心的状態を保つことは困難でカミュは絶望と不動性は表裏一体であることを示唆している。一方岩に象徴された石の価値とかそのイメージは「世界の真実」によって告げられることをメルソーは示唆するのだが、彼にとって自己石化するということは自らの死の代価に石の不動性をになうものと仮想された自分自身への夢と願望をかすかに託すことと調和する心の余裕は「心は歓喜にひたりながらあの不動な世界の真実に還っていった」という表現に感知できる。

しかしこの歓喜とは生命の躍動感とか精神的余裕の中から、あるいはたとえば死んでいく筈の

人が奇跡的に一命をとりとめたりした時の実感の中から生じるものだろう。

自分自身のこの世からの感覚、心情、精神の次元での完全な消失を直前にしての死の苦悶の中ではそういう心の余裕などは残らず、深遠の奈落に一直線に落下していく中で、もしあるとすれば石の不毛性にかすかに自らを連ねることぐらいのものではなかろうか。いずれにしてもメルソーの自己石化志向は「世界」志向と調和し「世界」到達を目指したものであることが理合されるであろう。しかしながらカミュの自己石化志向はシーシュポスのように自らに与えられた生の不条理を石に仮託されたような堅忍不拔の意志と努力で生きていく基本姿勢の方によりふさわしく反映しているようだ。『神話』のシーシュポスは思い石を山頂まで持ち上げるという非常に過酷な刑罰を神々に課せられる。そしてこの労働の代価は全く報われない運命をにう。それでも彼はこの岩を渾身の力をこめて、ここでも拡大強化された心身のエネルギーを燃焼させながら持ち上げていくが、その重圧に耐え切れずに手放した瞬間、自然の重力で落下していくその岩をじっと見つめながら再び支え持ちあげようとして自らも降りていく。岩を持ち上げる大いなる苦痛が体力の限界とともに一時終わるこの休止の間、つい今しがたまでこの岩と間近に格闘してきた現実の体験が彼自身に宿るかのように、彼は「これ程間近に石と取り組んだひとつの顔はすでに石そのもの」《Un visage qui peine si près des pierres est déjà pierre lui-même!》⁽³⁵⁾と化していく。

非常に堅固な物質である石とこれ程間近に、体ごと無心になって取り組んだ結果の石へのイメージ化が彼の顔になされるのだ。このシーシュポスの石化した顔には、片意地なまでの頑固さとか意地でもって石のような堅固な心を自らになおうとする作者の意志と願望がこめられているようで、このこと自体がカミュ自身の自己石化志向の特徴といえるだろう。しかしこの岩を持ち上げることの果てしなく過酷な労働の代価は全く得られないかもしれないという失望・諦念と、いやあるいはこの余りにも大きな苦難はいつかは報われるかもしれないという希望が彼の心の中で交錯することもさることながら、そういう意識にとらわれない程非常に緊張した精神状態と全く徒労な人生を辿ることの宿命観にこの神話の人物が悲劇的であることの真実性と感動が蘇るのだ。そしてシーシュポス自身自分の悲劇的運命に沈潜するよりもこの余りにも過酷な神々の責め苦を敢えて甘受しながら、山頂目指して岩を持ち上げる自分自身との闘争を重ねながら石のような堅忍不拔の努力を続けていく。

結局神話上のこの人物は純真・誠実に生きようとするほど人生はその不条理性を深めることを彼の過酷で無益な岩との闘争を通じて示唆していて、この闘争は石の堅固な意志と死によって限界づけられた生への激しい情熱でもって生き抜くことの高次で奇特な人生の教訓となっているのである。愛とか利得心あるいは情念に出来るだけ捉われることのない、すなわち誤魔化しのないという意味で純真・誠実な人生を送るとすれば、既述したように無反応性、不変化性、不毛性等の意志の諸特性を自分の意識内に刻んで生きること、つまり自らを出来るだけ空しくしながら生きることが重要になるのだろうが、いくら空しい人生でも生きる意志と情熱を失わない限り、そしてその人生を生きる主体があくまでも自分自身であるという自覚が強くある限り孤高

性ある生の誇りを自らに締め出すことは出来ないだろう。その限りにおいて、神の如く崇められた「世界」を目指しての上昇のベクトルが石の拡大誇張された特性であるあの不動性、永続性、あるいは荘重性への自己転化の願望や意志によって生かされていることも否定できないだろう。

註

- (1) Alain Costes, *Albert Camus ou la parole manquante, études psychanalytique*, Paris, Payot, 1973, p.13.
- (2) ジャン・オニミュス, 鈴木悌男, 浜崎史朗訳『カミュ — 作家と人間叢書 —』, ヨルダン社, 1975年, p.15.
- (3) Roger Quillot, *Mesure et démesure charnelles dans La mer et les prisons, essai sur Albert Camus*, Les essais CCIX, Gallimard, 1980, p.54.
- (4) Albert Camus, *Carnets I, mai1935 — février1942*, Gallimard, 1962, p.32.
- (5) *Ibid.*, p.86.
- (6) *Ibid.*, p.30.
- (7) Laurent Mailliot, *Albert Camus ou l'imagination du désert*, Les Presses de l'Université de Montréal, 1973, p.40.
- (8) *Ibid.*, p.214.
A Vicence le soir est non seulement doux, mais «douceux et tendre, soyeux derrière les cyprès» (EE.37) Le soir est féminin, maternel; il séduit, il accueille,……
- (9) *Ibid.*, p.47.
- (10) Albert Camus, *Noces à Tipasa dans Noces, Essais, Oeuvres Bibliothèques de la Pléiade*, Gallimard, 1965, p.57.
- (11) Roger Quillot, *La mer et les prisons, Essais sur Albert Camus, op. cit.*, p.53.
- (12) Albert Camus, *Carnets I*, op. cit., p.18.
- (13) Albert Camus, *Le vent à Djémila dans Noces, op. cit.*, p.65.
- (14) Laurent Mailhot, *Albert Camus ou l'imagination du désert*, op.cit., p.230.
- (15) Albert Camus, *Le vent à Djémila, op. cit.*, p.65.
- (16) *Ibid.*, p.62.
- (17) *Ibid.*, p.62.
- (18) *Ibid.*, p.62.
- (19) *Ibid.*, p.62.
- (20) *Ibid.*, p.62.
- (21) Pierre-Henri Simon, *Albert Camus ou l'invention de la justice dans L'homme en procès*, les Editions de la Baconnière, Neuchâtel, 1961, p.94.
- (22) Albert Camus, *Le vent à Djémila*, op. cit., p.87. Carnets I の1937年9月のFiesoleの箇所にも上と殆ど同じ文がある。
- (23) *Ibid.*, p.61.
- (24) Albert camus, *L'Etranger dans Théâtre, Récits, Nouvelles d'Albert Camus, Oeuvres Bibliothèque de la Pléiade*, Gallimard, 1962, p.1212.
- (25) Laurent Mailhot, *Albert Camus ou l'imagination du désert*, op.cit.. p.229.
- (26) Albert Camus, *Cahiers Albert Camus I, La Mort heureuse*, Gallimard, 1971, p.71.
- (27) *Ibid.*, p.71.
- (28) *Ibid.*, p.121.

- (29) Pierre-Henri Simon, *Albert Camus ou l'invention de la justice* dans *L'homme en procès*, op. cit., p.95.
- (30) Albert Camus, *La Mort heureuse*, op. cit., p.121.
- (31) *Ibid.*, pp.123~124.
- (32) *Ibid.*, p.193.
- (33) *Ibid.*, p.204.
- (34) Albert Camus, *Carnets II*, Gallimard, 1964, p.152.
- (35) Albert Camus, *Le Mythe de Sisyphe* dans *Essais d'Albert Camus*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972, p.196.